

# History of Academy

法政大学アカデミー合唱団は今年、50周年を迎えました。  
今から50年前、アカデミーはどのように生まれたのか、どんな合唱団なのか。  
アカデミーの生い立ちを簡単にご紹介したいと思います。

1962 法政大学アカデミー合唱団として発足  
(10月22日)

常任指揮者・福永陽一郎先生

第1回定期演奏会

(都市センターホール)

「蔵王」「パレストリーナ/ミサ・イステ・  
コンフェソール」「WEST SIDE STORY」  
「黒人霊歌集」



第1回定期演奏会

〈きっかけは1冊の楽譜、そして女子学生の涙〉

1958年のとある日のこと、二人の学生が電車の中で熱心に楽譜を読んでいた。

その隣では、細身で背の高い男性が彼らの開いた楽譜を気にしている。

「君たち、どこの学生だい？ 僕は指揮者なんだ」

二人の学生は法政大学混声合唱団(法混)の団員であった。学校に戻って顧問の教授に話してみると、その人はオペラ分野で活躍している著名な指揮者だという。

法混は創立5年目、常任指揮者や指導者をおかず、学生だけで活動していた。「もっとうまくになりたい」、そのためにはぜひとも先生に指揮をしていただきたい。こんな駆け出しの学生合唱団を振ってもらえるはずがない、という声を振り切り、申し出た。

小さな偶然が、「陽ちゃん」こと福永陽一郎先生を常任指揮者として迎えるきっかけとなったのである。

初めて練習会場に訪れたときのことを福永先生はこう書いている。

'58年の12月、ちょうど法混は第3回の定演を終ったところだった。同好会が発足してから5年の月日が経っていたのだが、その間いったいどんな指導が為されていたのか、私は耳を疑った。音楽の基礎がまるでできていない。と言うより、音楽の基本がまるで無視されている状況であった。

そんな合唱団であったが、団員も先生も若く、情熱にあふれていた。「私がやるからには、日本一の混声合唱団にしてみせる」という福永先生の指導により、活動を広げ、大いに成長していった。しかし、成長途上の若い合唱団に大きな転機がやってくる。

福永先生が常任指揮者となって4年目、1年生のときから福永先生の指導のもとで歌ってきた団員が最上級生となり、合唱団としてさらなる一步を踏み出そうとしていた矢先のことだった。

時は1962年である。「60年安保闘争」の余波が合唱団を襲った。

法混のメンバーの中にも政治的自覚をもった団員がいた。その一団と幹事側との間に亀裂が生まれ、「合唱を利用して日本の社会を立派に変革していこう」というメンバーと、「聴衆を感動させる歌を歌いたい、そのための技術を身につけたい」というメンバーの間の溝は深まるばかりだった。誹謗中傷のピラがまかれ、暴力的な行為や暴言がないかと練習会場にもカメラやマイクを持ち込んで妨害するなど、闘争の手段は次第にエスカレートしていった。

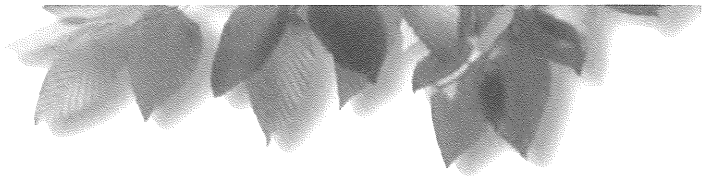
練習も勉学もままならなくなっていたその頃、ある日練習場を訪れた福永先生は入り口で女子学生たちが泣いているのに出会った。ピケ(\*)が張られ、練習場へ入れないのだという。その光景が福永先生を決断させた。合唱団にあって歌うことをやめ、何の意味があるというのか。思い切って分裂しよう、そして歌い続けよう、と。

約1年にわたる紛糾はこうして幕を閉じ、新しい一つの合唱団を誕生させた。アカデミーの名をつけたのは福永先生である。

1962年10月22日、法政大学アカデミー合唱団が発足した。

4期が卒業すると、アカデミーの誕生を直接知る団員はいなくなった。しかし、今でも新入生は夏合宿でその歴史を聞くのが伝統になっている。私たちはどんな時代にあっても、歌うことが好きで音楽をすることを第一義としてきた、そういう団体である。その一員になったのだ、という誇りを胸に抱きながら、アカデミーライフが幕を開けるのである。

(\*) ピケ：大学闘争の頃、学生たちはバリケードを張って授業をストライキした。  
保守派の学生を授業へ行かせないため、また敵が来ないか見張る監視役のこと。



1963 第一回演奏旅行  
(西条・広島・似島・松山)  
東京都合唱コンクール出場  
総合2位



第3回定期演奏会

1965 東京六大学混声合唱連盟加盟

1966 大久保昭男先生をヴォイストレーナー  
に招聘し、現在に至るまで、継続して  
ご指導を頂く。

第5回定期演奏会(虎ノ門ホール)  
「GESANGE ZUR FEIER DES  
HEILIGEN OPFERS DER MESSE」「日  
本のわらべ唄」「大中恩合唱曲集」「映画  
音楽集」「NEGRO SPIRITUALS」

### <アカデミー始動>

新しい合唱団として始動したものの、その活動は容易ではなかった。

文連(\*2)を脱退したため、校舎内の教室が練習場所として使えない。周辺の小学校などを練習場所にしたが、携帯電話やe-mailなどもちろんない時代である、練習場所を知らせるために学生食堂をたまり場にして常に誰かがいるようにし、ほとんど授業にも出られなかった。

しかしそんなすさまじい中でも着実に練習を重ね、発足から1か月半、12月7日第1回目の定期演奏会が開催された。曲目は合唱組曲「葦王」、パレストーリーナの「ミサ・イステ・コンフェソール」、ミュージカルの「ウェストサイド物語」、ニグロスピリチュアルズと、名曲ぞろいの4ステージ構成である。これらのレパートリーはアカデミーでずっと愛され続け、この50年で何度も取り上ることになる。

そして翌年3月には初めての演奏旅行にも行っている。初めてのコンクールでは、東京都大会大学の部(A)優勝、総合第2位と大健闘し、アカデミーは好スタートを切った。

分裂の際に除名された六連(\*3)にも1964年度には加盟が許され、毎年5月の六連定演、春～初夏の演奏会を始め、合宿(\*4)などの団内のイベントも、4年目には現在まで続くアカデミーの年間行事のベースが固まった。

高校生までは運動部員だったメンバーも多いアカデミーのこと、中にはハイキングやスポーツの大会のような行事もある。ハイキングは1971年に山手線を一周、一晩かけて歩く「山手一周ハイク」(\*5)へと変わり、野球にバスケットボール、サッカーなど様々なスポーツが盛んに行われている(\*6)。

(\*2) 文連：法政大学文化連盟。当時はサークル連合であった。

(\*3) 六連：東京六大学混声合唱連盟。現在は青山学院大学グリーンハーモニー合唱団、慶應義塾大学混声合唱団楽友会、東京大学柏葉会合唱団、法政大学アカデミー合唱団、明治大学混声合唱団、早稲田大学混声合唱団(五十音順)からなる。

(\*4) 合宿：春合宿(岩井海岸)、夏合宿(葦王)、秋合宿(岩井海岸)。1990年代からは早春合宿も始まった。ちなみに1974年に始まった葦王の夏合宿は、1年間(1976年)を除いて、ずっと続いている。

(\*5) 山手一周ハイク：2年生が主体となって行う「2年行事」のひとつで、現在に続くイベントである。2年行事にはこのほかに新歓BBQやダンスパーティー(通称ダンパ)、オークション、メンバー他己紹介紙『音の葉』の発行、演奏会の打ち上げ等がある。

(\*6) 様々なスポーツ：初期のころには野球大会やバスケットボール大会が大々的に行われていたようだ。ここ数年では野球をしたり、団内サークルAFA(アカデミーフットボールアソシエーション)が不定期に多摩キャンパスでサッカーをしているらしい。

# History of Academy

1967 京都・鹿児島・沖縄（名護・コザ・那覇）  
演奏旅行



守礼の門の前にて

1968 第7回定期演奏会にて、  
カール・オルフの「カトゥーリ・カルミナ」  
をアマチュア初演。

1969 福永先生病氣療養のため、  
関屋晋先生が常任指揮者代行に。

1970 学生運動激化のため演奏旅行を中止。



第10回定期演奏会での福永先生



第10回定期演奏会「運命の歌」  
指揮は畑中良輔先生  
ピアノは久邇之宜先生

## <パスポートを持って>

5周年の1年間は格別な大きな盛り上がりを見せた。「ダグさん」こと大久保昭男先生をヴォイストレーナーに迎えたのもこの年の4月。5月の5周年記念演奏会を皮切りに全法政音楽祭やチャリティーショーなど数々のステージに出演し、コンクールでは都大会で初の総合1位、全国大会への切符を得た（全国大会初出場2位と好成績を残したが、1位を取れなかった悔しさはその喜びよりずっと大きかったようだ）。東京での定期演奏会を経て、満を持しての演奏旅行へ向かうため、団員たちはパスポートを申請し、ビザを取った。

行先は、沖縄だ。アメリカの占領下だった沖縄へ行くのは事実上の海外旅行であった時代である。沖縄へは船旅のため、真直ぐ行くのでは大変ということで沖縄に入る前に、東京から夜行列車で京都に入り京都エコーと演奏会をしてそのまま夜行で移動、鹿児島で鹿児島大フロイデと演奏会をし、またしてもそのまま船中泊で沖縄へという、今では考えられないハードな旅程であった。

沖縄での演奏会は名護、コザ、那覇の3つの会場だ。かさむ費用を減らすため米軍からバスを出してもらい代わりに軍の中でも歌うことになった(\*7)。沖縄だけでも6日間のうちに一般公開3回、テレビ出演2回、米軍関係3回と講習会を1回という強行軍である。

一足先に沖縄入りしたマネージャーは“うちなー時間”に戸惑っていた。名護町長によると、前売りはさばききれないがそれはみな当日に買えばいいと思っているからだ、という。それぞれの会場に、どれだけのチケットを用意するべきか、判断ができない。また、“うちなーちゅ”にとって6時59分までは6時のうち、演奏会も定時には始められないという。

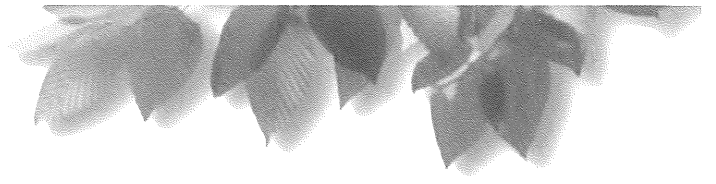
ふたを開けてみると、演奏会は想定をはるかに超える大盛況だった。定員300の会場に800、1,800の会場に2,200の人が集まる。プログラムはあっという間に売り切れた。演奏会が始まり最終ステージになってもなお客足が途絶えない。小さな公民館といった雰囲気の場合は熱気に包まれた。もちろん会場には入りきれず、外で聴いていく人も大勢いた。演奏が終わると外へ出て、歌いながら「ありがとうございました」と見送った。聴きに来ていた高校生が「法政へ進みたい」という。「音楽によって地元の方と交流をした」という感激は忘れられないものであった。

米軍キャンプでの演奏会も、また忘れられない。黒人兵はニグロスピリチュアルズに喜び、一緒に歌ってくれた。おしまいになると総立ちでアンコールを求められた。口笛すらとびかう、大喝采だ。ベトナム戦争へ徴兵された兵隊たちとカタコトの英語で交流すると、日米両国の青年たちはお互いの境遇に思いをはせた。

このときの演奏に非常に感激した米軍当局からは、合唱団と大学総長あてに感謝状が贈られた。

帰りの船に乗る前に撮った集合写真には、堂々と中央に感謝状が掲げられたのだった。

(\*7) 軍の中でも：広島出身の団員など、米軍キャンプの中で歌うことはできない、と演奏旅行に参加しないものもいたようだ。また、軍の慰問をすることでベトナム戦争に加担することになるのではないかと疑問を持つ団員もいた。演奏旅行後に福永先生は、兵隊たちも同じ世代の日本の学生のコーラスを聴きながら平和への憧れをいっそう強くしたと思う、と語っている。



1971 創立 10 周年記念第 10 回定期演奏会  
 <ブラームスの夕べ> (渋谷公会堂・現  
 渋谷 C.C.Lemon ホール)  
 「ドイツ民謡集」「ジプシーの歌」  
 「愛の歌」  
 「運命の歌」客演指揮・畑中良輔先生  
 ピアニスト・久邇之宣先生  
 ※久邇先生出演。これ以降、現在まで  
 40 年に亘りお世話になる。

1975 アーリーサマーコンサート  
 ※従来、「スプリングコンサート」、「ニュー  
 グリーンコンサート」と称していた前期の  
 コンサートをこの年より「アーリーサマー  
 コンサート」に改称し、現在に至る。

全日本合唱コンクール大学の部にて  
 金賞受賞 (混声合唱として初)  
 課題曲「ラシーヌの雅歌」・  
 自由曲「島よ」より

1976 全日本合唱コンクール連続金賞受賞

創立 15 周年記念第 15 回定期演奏会  
 「光る砂漠」「わたしの動物園」  
 「モーツァルト/レクイエム K626」

1977 全日本合唱コンクール  
 三年連続金賞受賞

1978 全日本合唱コンクール  
 全国大会招待演奏

1980 東京工業大学混声合唱団コール・  
 クライネスとジョイントコンサート  
 (1983 年にも開催)

1981 創立 20 周年記念フェスティバル  
 (郵便貯金ホール・現メルパルクホール)

第 20 回定期演奏会 (郵便貯金ホール・  
 現メルパルクホール)  
 「季節のたより」「幼年連祷」  
 「クレーの絵本第 2 集」「深き淵より」



第 20 回定期演奏会のリハーサルでの  
 福永先生

### <ブラームスアーベント>

福永先生が病氣療養をされ、関屋晋先生(\*8)を指揮者代行にお呼びしたり、  
 学生運動激化のためにとうとう演奏旅行が中止になったりと、順風満帆とは  
 いえないながらも、どうかここまでこぎつけた、アカデミー 10 周年である。  
 10 周年の定期演奏会には何か特別なことを、慶應ワグネルがワーグナー  
 ならアカデミーは・・・、ということで決まったブラームスアーベント (ブラ  
 ムスの夕べ) だった。

このとき、アカデミーは福永先生や大久保先生と同じように「この人なくし  
 てアカデミーは語れない」と言っているほどの大切な人に出会った。ひとステー  
 ジを受け持ってくださった畑中良輔先生に、ピアニストとして久邇之宣先生を  
 紹介していただいたのである。当時はまだ、国立音楽大学の学生であった。  
 久邇先生のピアノは「伴奏」の域を超えて「ピアノの演奏と合唱」という関  
 係に迫る、感動的なものであった。  
 そして、畑中先生とは法混時代以来の共演である。福永先生をお呼びして  
 初めての演奏会、一団で全ステージを歌える実力のなかつたために畑中先  
 生にソロ曲の披露をお願いしていたのだ。アカデミーとして活動を続けて 10  
 年、その畑中先生に今度は指揮をしていただけるほどに成長を遂げていた。

(\*8) 関屋晋先生: 第 8 回 (1969) の定演でも「水のいのち」を振っていた。のちに触れるが、1991  
 年から 10 年間、音楽顧問を務めていただいた。ちなみに「水のいのち」は関屋先生のほか 10 周年スプリ  
 ングコンサートと六連単独 (1971) で北村協一先生、翌年 (1972) の演奏旅行で福永先生 (その後もた  
 びたび取り上げられた)、さらに 2002 年の定演と演奏旅行では浅井敬堂先生と、名だたる巨匠たちに何  
 度も歌わせていただいている珠玉の名曲である。



第 28 回全日本合唱コンクール全国大会で  
 混声合唱団として初の金賞受賞

### <黄金時代、到来>

ところで、1966 年にコンクール全国大会に出場した後も、アカデミーはコ  
 ンクールに挑み続けていた。しかし、その年の 2 位を上回る成績を残せぬまま、  
 今年こそは、と思われた 1974 年でもついに 2 位に甘んじてしまう。

悔しさを抑えきれず、3 年次テノールとベースのパートリーダーだった 2 人  
 が「金賞を取るまで卒業しない」と留年を決めた。幸い 13 期の彼らは、5 年  
 で卒業できることになる。

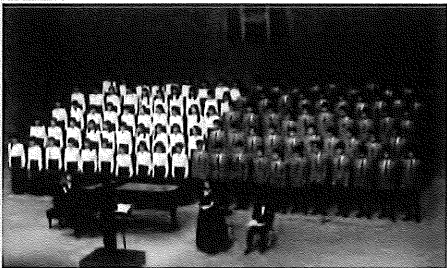
選択制の課題曲にはフォーレの『ラシーヌの雅歌』を、自由曲には大中原  
 の『島よ』を選んだ。

その頃のベースはスタートダッシュは遅いものの一度覚えたらすごい力を  
 発揮する“黄金のベース”と言われたパートであった。そのベースパートから  
 始まる曲ならば絶対大丈夫、という意図での『ラシーヌ』の選択だ。そして、  
 自由曲の『島よ』では荒々しい嵐と苦悩、それが過ぎ去ったあとの静寂、夕  
 暮れ時の安らぎの音色・・・福永先生の音楽性に合唱は応え、その  
 頃調子を上げていたアカデミーの実力が異観なく発揮されたステージとなっ  
 た。

おのずとついてきた結果は、大学の部、混声合唱で初めての金賞であった。  
 そこからは快進撃。“黄金のベース”の後には“テノール王国”が台頭し、3  
 年連続金賞受賞という快挙を成し遂げるのである。

さらに 4 年目には法政大学交響楽団を連れて招待演奏を行い、みな晴れ  
 やかな顔で舞台に立った。

# History of Academy

1982	「幼年連袴」レコーディング(東芝EMI・現EMIミュージックジャパンよりLPレコード発売、後にCD化)  アーリーサマーコンサート <行ってきます。ヨーロッパ>  ヨーロッパ演奏旅行(第8回ヨーロッパカンタータに日本代表として招聘)
1984	世界合唱祭 第1回アジア週間 in 長野
1986	第25回定期演奏会 (郵便貯金ホール・現メルパルクホール) 「信時潔作品集」「祈りの虹」「海の構図」 「レスピーギ/主の降誕への賛歌」
1990	福永陽一郎先生ご逝去  福永陽一郎先生追悼演奏会
1991	第30回記念定期演奏会 (メルパルクホール) 「コタンの歌」「ブラームス/愛の歌」「十 びきのねずみ」「ドボルザーク/テ・デウム ※瀬戸理恵子先生ソロ出演  音楽顧問・関屋晋先生/常任指揮者・田 中登志雄先生
	
	第30回定期演奏会 ソプラノソロは瀬戸先生
1992	瀬戸理恵子先生を 女声ヴォイストレーナーとして招聘  第31回定期演奏会 「木下牧子/地平線のかなたへ」 混声版初演
1996	第35回記念定期演奏会 (メルパルクホール) 「ブルックナー/MESSE E-MOLL」 「Five Flower Songs」 「そよぐ幻影」 「メーリケの主題による追想詩『春』」

## <そして世界へ・・・>

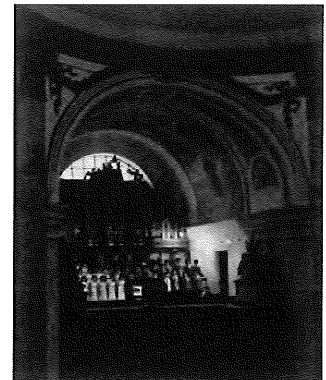
20周年を迎えたアカデミーは成熟期を迎えようとしていた。福永先生の還暦記念ファミリーコンサート「陽ちゃんと一緒」に始まる数々の演奏会とコンクールと精力的に活動し、秋にはウィーン留学から帰国した久邇先生を再びピアニストに迎えた。年明けには「新実徳英作品集」のため『幼年連袴』で初のレコーディングを行っている(\*9)。

そして、20周年を乗り越えたその翌年1982年の年間計画には2つの“大事件”があった。ひとつは10年間連続出場をしていたコンクールへ出場しなかったこと、そしてもうひとつ、とにもかくにもヨーロッパ演奏旅行である。

3年に1度開かれる合唱の祭典、ヨーロッパカンタータ(於ベルギー・ナミュール)への参加を軸に、オーストリアやドイツの各地を歌い旅した。ハードスケジュールぶりはかつての沖縄演奏旅行に勝るとも劣らない。

.....

- 1982.7.19 東京発
- 20 パリ→ウィーン
- 22 カール教会演奏会
- 23 ウィーン→ザルツブルク
- 24 フランチスカーナ教会演奏会
- 25 ザルツブルク→デュースブルク
- デュースブルク合同演奏会
- 27 デュースブルク→ケルン
- ケルン大聖堂演奏会
- 28 ライン下り
- 29 ケルン→ナミュール
- 30 ヨーロッパ・カンタータ参加
- 8.3 ネイション・コンサート  
(日本代表として出演)
- 4 アトリエ・コンサート
- 7 オープン・シンキング
- 9 ナミュール→パリ
- 13 東京着



ウィーン カール教会にて

.....

本場の空気に触れる、文字にすればたった9文字、しかしその背景には言葉にできないほどのカルチャーショックがある。

かの地には合唱が、音楽が、ごはんを食べ仕事や学校に出かけるのと同じレベルで生活に溶け込んでいる、ということを目で見て耳で聴いて肌で感じた旅であった。

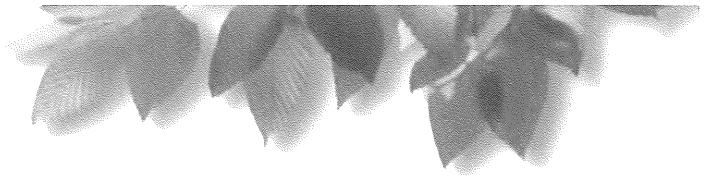
そして文字通り空気が違う。乾燥した空気と高い天井の教会で歌うと、日本では聴きえない響きが聴こえた。ブルックナーの「Ave Maria」、日本では長すぎる空白に感じられたゲネラルパウゼ(\*10)がなんと美しく響いたことか。この残響の中に、ヨーロッパ音楽の原点を見出したようであった。

教会やホールの美しい響き、そしてカンタータでは世界中の合唱人と作り上げるハイドンの音楽、歌のよるこびに満ちた日々は駆け足で過ぎて行った。この演奏旅行から得た見えないにかによって、「アカデミー合唱団は合唱団になりました」とは福永先生の言葉である。

帰国後の練習では、誰ひとり、必要以上に“がんばる”といった精神的なこぼりがなく、無駄に声を出す者もいない。みんなが“合唱する”とは何かを知っている、そういう濃密な雰囲気がみなぎっていたという。

(\*9) 初のレコーディング:現代合唱曲シリーズ「新実徳英作品集」として東芝EMI(当時)よりLPレコードを発売。その音源は現在財団法人日本伝統文化振興財団より発売のCD、合唱ベストカプリングシリーズ「新実徳英/幼年連袴」にてお聴きいただくことができる。同時収録は松原混声合唱団(指揮・関屋晋先生)による同曲。

(\*10) ゲネラルパウゼ:全体の休止。すべてのパートが休止になる部分。ブルックナーの「Ave Maria」はこのゲネラルパウゼが効果的に取り入れられたたいへん美しい曲である。



2001	アーリーサマーコンサートで小久保大輔先生を迎え、以後現在までアーリーサマーと定期演奏会のご指導を頂く。  第40回記念定期演奏会 (新宿文化センター) 「ブラームス合唱曲集」「木とともに 人とともに」「海の構図」「聖歌四篇」
2002	演奏旅行で浅井敬壹先生を迎え、以後現在まで定期演奏会と演奏旅行のご指導を頂く。
2003	アーリーサマーコンサートで北村協一先生を迎え、以後3年に亘ってご指導を頂く。
2005	関屋晋先生ご逝去
2006	戦後60年を記して、演奏旅行先の広島で、「祈りの虹」を演奏。  北村協一先生ご逝去  アーリーサマーコンサートで、作曲家・源田俊一郎先生の客演指揮による「ふるさとの四季」を演奏。  第45回定期演奏会 (品川区総合区民会館 きゅりあん大ホール) 「イギリス民謡集」「万象」「愛の歌、新愛の歌」「思い出のために」
2007	アーリーサマーコンサートで、作曲家・荻久保和明先生の客演指揮による「季節へのまなざし」を演奏。
2008	アーリーサマーコンサートで、作曲家・新実徳英先生の客演指揮による「幼年連袴」を演奏。
2009	アーリーサマーコンサートで、作曲家・佐藤眞先生の客演指揮による「蔵王」を演奏。
2011	瀬戸理恵子先生ご逝去 (6月16日)  50周年フェスティバル (7月10日) (昭和女子大学 人見記念講堂) 「新しい歌」「プーランク/グロリア」「つながる～歴代学生指揮者が紡ぐ歌リレー～」 第50回定期演奏会 (11月27日) (東京オペラシティコンサートホール タケミツメモリアル) 「荻久保和明先生作曲による委嘱作品 合唱組曲『小さなのち』初演 (予定)」ほか

### <突然の別れ>

1990年2月10日、アカデミーは深く、大きな悲しみにおそわれた。

福永先生ご逝去。

検査入院で異常なしの診断を得、退院したその日の夜という、あまりにも突然の死であった。福永先生に育てられたアカデミーにとって先生との別れほど悲しいことはない。最後のステージは第28回定期演奏会のイタリア・オペラ合唱曲集、そしてアンコールのThe impossible Dreamとクロージングソング、夜のうただった。

生前、福永先生は「金持ちが貧しい人の苦勞をわからないように、僕を失ってはじめてそのありがたさに気づくだろうね」と語ったことがあるという。それはこの日、現実のこととなってしまった。

もう福永先生の指揮で歌うことはできない……

深い悲しみを抱えながら新たな1年を迎えようとしていた。追悼演奏会に向けてOB合唱団が設立され、青春を共に過ごした仲間と再び歌えることは、卒業したOBにとって喜ばしいことであった。

30周年の年には関屋先生を音楽顧問、7期のOBでもある田中登志生先生を常任指揮者に迎えた。

またその年に初めてソプラノソロでお呼びした瀬戸理恵子先生を翌年第31回の定演(\*11)で再びプーランクの「Gloria」ソプラノソロでお呼びし、その時から女声ヴォイストレーナーをお願いすることになった。少女のようにまっすぐ軽やかで、温かな先生の歌声は女声陣の憧れであった。

たくさんの人に支えられながら、アカデミーは歩み続けたのである。

(\*11) 第31回の定演：このとき、合唱曲集「地平線のかなたへ」混声版の初演もされている。本日演奏する「春に」はその第1曲である。

### <歌い続けて>

ここからは少し駆け足で追っていこう。

5年ごとのアニバーサリーの記念であった現役OB合同のステージは、1998年、アーリーサマーコンサートで関屋先生の「OBも一緒に歌いましょう」という呼びかけにより毎年恒例のステージとなった。毎年一緒に歌う仲間として、現役とOBの絆はより一層強くなることになる。現役との合同ステージはOB合唱団に所属していないOBにも門戸が開かれ、毎年多くのOBが現役とステージを共にしている。

さらに、40年目のアーリーサマーコンサートではうれしい出会いがあった。アカデミーの親ともいえる福永先生のお孫さん、小久保大輔先生を指揮者として、この年から毎年お呼びすることになったのだ。

また、この頃から常任指揮者を置いていないながらも浅井敬壹先生には定演と演奏旅行、北村協一先生にはアーリーサマーコンサートと、次々にご縁が生まれていった。

45年目のアーリーサマーコンサートからは、作曲家による指揮シリーズとでもいおうか、OBとの合同ステージに作曲家の先生をお呼びして自作の曲を振っていたと、という試みもなされる。

その曲が生まれたその世界観をそのままに伝えられ歌うというめったにない経験に、現役もOBも胸をときめかせた。

そして今年、50年。ひとりひとりの4年間が重なり、積み上げられた50年だ。数々のうれしい出会いも悲しい別れもひっくるめて、厚く積み上がった50年。

しかし現役諸君、それを重く感じる必要はないのだ。君たちは前を向き、歌えばいい。そうして歌い、泣き、笑った4年間をそっとそこに重ねればいい。

我々は、どんなときでも歌を愛するアカデミー合唱団。

この先も10年20年・・・100年先も同じように歌い続けていると信じている。

(44期・大河 愛)

# Concert Tour of Academy

## アカデミーの演奏旅行について

法政大学アカデミー合唱団を説明する際に、演奏旅行は、大切な要因となります。ここでは、アカデミーのオリジナリティであり、アイデンティティとも言える、演奏旅行（以降は、国内で通称として使用している「演旅」と略します。）についてページを割いてみたいと思います。

アカデミーの「演旅」は創立当初より、学生運動が激化して中止となった1970年を除いて、毎年ほぼ3ヵ所ずつ、50年間で延べ150ヵ所以上の土地でコンサートを開催してきました。一回のコンサートの来場者を平均800人とすると約12万人もの方々にアカデミーの歌声を届けてきたこととなります。

「演旅」の目的は、当初より大きく2つあります。「混声合唱の普及」と「地元合唱団との交流」です。「混声合唱の普及」については50年前と現在では意味が異なっていると思います。全国どこへ行っても東京以上にレベルの高い合唱団が存在し、またインターネットなどで様々な音源が容易に入手出来るようになった現在、東京から行くことだけに「普及」という偉そうな言葉は、使うのも憚られます。しかし、アカデミーの演奏に始めて接して頂く全国の一人でも多くの方々に歌声を届けたいという気持ちが、新しい「普及」という意味になるのかと思います。「地元合唱団との交流」については、人と人が直接交流することでもあり、どんなに通信手段が発達しても、現地に行き、オフラインで一人ひとりが接することには、勝るものはありません。この50年間に交流させて頂いた合唱団や合唱団員の数は、大学合唱団としては、間違いなく日本一であろうと思っています。

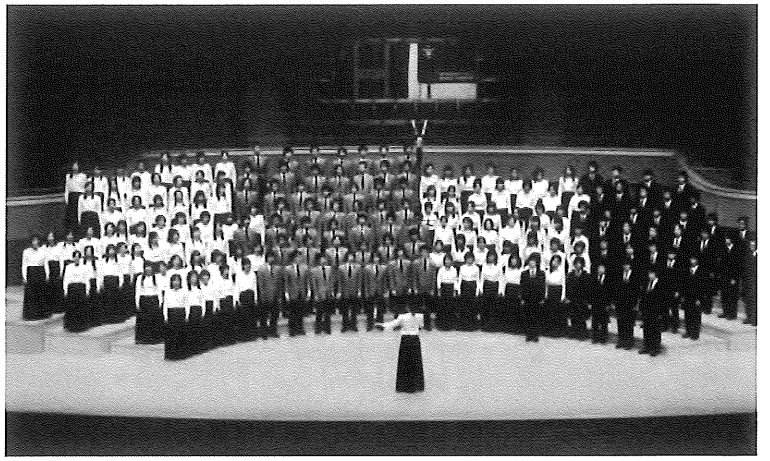
アカデミーの「演旅」が他の合唱団のそれと圧倒的に違うことが幾つかありますが、一年間の活動の集大成的な意味を持つということが一番大きな違いかと思えます。通常は、定期演奏会（以降、定演と略します。）という名のコンサートが、一年の集大成であり、4年生にとってはクラブ活動の最終ステージになります。実際に、アカデミー以外、ほぼ100%の大学合唱団は、そういう活動形態になっています。しかし、アカデミーは、少々異なります。定演は、もちろん最高の演奏を披露するのが目標であり、後期の活動のゴールですが、その後、さらに磨きをかけ、卒業式の数日前まで4年生は練習を積み、前年の4月に入団した一年生もこの時期には、ずいぶん実力をつけ、一緒に「演旅」へと旅立って行きます。学生の年度（4～3月）の最終月のステージであり、技術的にも、頂点に達した演奏を披露出来るわけです。ただし、この演奏は、地方で行われるために、団員の家族や友人でも、実際に耳に出来る人は殆どいません。一年のピークとなる演奏を東京で、定演で、披露していないということが、もしかすると意見が分かれるところかもしれません。もちろん定演に匹敵するコンサートを、全国の様々な方に聞いて頂けるということが、アカデミーにとっては一番の喜びであるのです。注：他の大学の「演旅」は、多くは夏季に実施される。また、春季に実施する場合は、定演を終えた後のため、最上級生はいない。

春季に実施されるアカデミーの「演旅」ですが、1月末の期末試験を終えたアカデミーのメンバーの行動は、大きく2つに分かれます。多くの団員が含まれる側、つまり「演旅」で歌う側の団員は、昼はアルバイトに明け暮れ（「演旅」の費用を捻出するためが多い）、夜になると、日々都内某所に集合し（この時期、大学は入学試験のため、使用出来ない場合が多い）、練習に明け暮れます。もう1つの側が、「演旅」を迎える側、マネージャー達です。3ヵ所各2名、計6名のマネージャーは、試験が終わるのを待っていたかの様に、各地の「演旅」先へと一足先に旅立って、事前準備を始めます。この滞在は、コンサート終了後まで一ヶ月半近くになる長丁場で、ウィークリーマンション等を借りる場合もあれば、OBの家に居候する者など、様々です。現地の校友会、後援会、合唱連盟などの地縁や紹介を活かして、プログラムの広告取りやチケット売りに奔走し、東京から来る団員を迎える準備を進めています。これが、他の大学合唱団の「演旅」と大きく異なるもう一つの点です。つまり、地方においても自分たちが主催し、運営するコンサートを行っているのです。多くの大学合唱団のそれは、地元の校友会等、別の主催者が存在する場合が多く、団自身がリスクを担うことは少ないといえます。あるいは、指導者自らが学生に代わって現地に飛んで準備する団もあると聞きます。しかし、アカデミーは創立時から、学生の主催でコンサートを開催し続けてきました。もちろん、法政というマスプロ大学の利点を最大限に活かして。全国に点在されている法政大学OB（校友会という同じ大学を卒業したという繋がり）や、後援会（お子様が法政の学生であるという繋がり）に、パンフレットへ広告を掲載して頂いたり、チケットを買って頂いたりしているのは事実でもあり、過去何千人、何万人という方の厚情に支えられてのコンサートです。でも、そこに人と人の繋がりも生まれています。

マネージャーの準備は、前年の「演旅」が終わった後、一年程前から始まります。パンフレットに載っている過去の「演旅」先の日本地図とにらめっこしながら、翌春に自分たちの歌声を届けたい土地の名前を挙げ、大学の校友会や後援会等とも相談して、「演旅」先の選定を行います。稀に自分の生まれた土地でコンサートを開くことが出来る運のいいマネージャーもいますが、殆どのマネージャーは、行ったこともない土地のコンサートホールの選定から始め、夏休みの頃から何度かに亘って現地を訪れ、様々な人脈ネットワークを築いていきます。そして並行して、一緒にコンサートに出演して頂ける合唱団を探します。この時にアカデミーの「演旅」の強みが発揮されます。大学合唱団の地方でのコンサートは、出費を抑えるために、学生指揮者を中心としたプログラムで構成する場合がありますが、アカデミーの場合は必ず、東京のコンサートと同じ先生方と同行して頂き、東京と同じプログラムを組みます。なので、過去、福永陽一郎先生や関屋晋先生に指揮をして頂いた当時は、コンサートで実際に先生が現地に訪れる、という旨を地元の合唱連盟に相談すると、直ぐに一緒に出演して頂ける合唱団を紹介して頂いたものです。さらにこの十年程は、浅井敬壹先生と同行して頂いていますが、先生のご意向もあり全日本合唱コンクールで金賞、銀賞等の受賞団体とも共演する機会を頂いています。単なる賛助出演ではなく、ジョイントという形式を取って、同じステージで隣に立ち、一緒に歌う機会を頂いています。過去の共演団体を次ページに一覧表として掲載しましたが、何度も共演頂いている京都エコー、安積黎明高校（旧・安積女子高校）をはじめ、全国トップクラスの合唱団と一緒に歌うことが出来るのがアカデミーの「演旅」でもあります。つまり最高のメリットを享受しているのは、実はアカデミー自身と言えるのです。



函館駅の青函連絡船乗り場にて。  
最前列に福永先生（1976年3月）



北海道大学混声合唱団とジョイントコンサート  
札幌コンサートホール Kitara (2009年3月)

毎年、春の声を聞く頃になると、アカデミーは、全国の「演旅」先へと出掛けて行きます。アカデミーの「演旅」は、物見遊山的な要素は非常に少なく、さらに現地で共演団体との練習が組まれる場合も多く、観光は、むしろ「演旅」が終了してから帰路の楽しみです。一カ所、二カ所と旅情を楽しむ暇もなくコンサートは開催され、気が付くと最終地。多くの者が、思い出に万感の想いを寄せて、溢れる涙と共に、最終地のコンサートは、幕を閉じます。

ところで、「演旅」では、東京のコンサートでは聴くことが出来ない曲、「演旅」でしか歌わないという2つの曲があります。1曲は、ミュージカル「ラ・マンチャの男」の「Impossible Dream」。「見果てぬ夢」という邦題が付くこの曲は、正に一年間の活動を締めくくりに相応しい曲といえます。そしてもう1曲が、一年に一度、「演旅」の最終地の最終ステージのアンコールでだけ歌われる「My Way」。この曲が4年生にとっては卒団の曲であり、その年のメンバーで歌う最後の曲になります。この2曲とも福永先生の編曲であり、特に「My Way」は、日本語詞も福永先生によるものです。「そこにはいつでも、歌がある」という言葉で終わるこの曲の歌詞を、今回のコンサートチラシのコピーとさせて頂いたのは、そんな理由からでもあります。「そこには」の「そこ」という言葉には、単純な場所の意味ではなく、現役もOBも含めたアカデミーの全てのメンバーの心の中に「歌がある」、そして「アカデミーがある」という意味と考えています。

アカデミーが存在し続ける限り、「演旅」は続いて行くはずで、「そこにはいつでも、歌がある」から。

最後に、福永先生が毎年の「演旅」パンフレットに寄稿して頂いていた当時の文章を転記して、このページを終えます。

『学生団体の演奏旅行について、あまり芳しくない風評が伝わる場合があります。その合唱団の定期演奏会がいつも好評であるのに、旅行に出た先での演奏が、それほど効果をあげないのが第一の原因なのだろうかと思います。』

法政大学アカデミー合唱団が心掛けていることは、ですが、少し違うことにあります。言うまでもなく、法政大学アカデミー合唱団においても、年に一度の定期演奏会は、その年の決算であり、たくわえた力の発表の場であり、その成否は、その年のクラブのありかた全体にとって、もっとも重要な問題であることには変わりはありません。けれども、一方では、定期演奏会だけが大切なことで、年間を通じた活動の全てがそこに集約されるというのでは、大学の合唱団として、あまりにも偏った狭苦しい日常だとも考えられます。

クラブ活動は、と言うよりも、アマチュアの音楽活動は、一日一日の生活の中に音楽の喜びが感じられるといったものであるべきで、一年を周期として、一度だけのピークのために、日常の時間が犠牲になってはいけません。定期演奏会は大切な行事ですが、そのほかの毎日毎日、音楽を楽しみ、音楽をやることの意味をつかみ取るような日々でありたいものです。

ですから、東京を離れて旅行をし、その旅先で歌を聴いて頂くことも、東京のステージと同様、聴く人のためというより、アカデミー合唱団自身の喜びでなければなりません。

法政のアカデミー合唱団は、創立以来、学園紛争の年の一回を除いて、休みなく春の演奏旅行をやってきました。その旅行での演奏会は、すべて自己主催で、全員参加で行われます。もちろん、地元の方々の協力なしには、何事も実行出来ませんが、地元主催の会で当然予想される種々の制限から自由になってこそ、東京での定期演奏会と同様の成果を期待出来るので、いままでそうやってきましたし、かえって地元の方からも喜んで頂きました。先乗りで苦勞しているマネージャーたちは、この上ない社会勉強をしていますし、合唱団全部が、親類家族でないお客様に対して、ともに音楽を味わった感動を伝えようと、より以上の集中でステージに立つわけです。

今年度は、久しぶりに全日本のコンクールに出場しました。このことで得た利益は、目に見えないながら、大きなものであったと思うのですが、慣れないためにスケジュール調整がうまくいかず、それゆえ、定期演奏会そのものは、練習不足のまま開催されてしまいました。それだけに、私や団員たちのこの演奏旅行にかける重みは、非常に大きいものになっております。例年のように、また例年以上に、様々な経験を持った一年でしたが、この春の演奏旅行は、文字どおり総決算であって、以前そうであったような定期演奏会の繰り返しではなく、より新しくより大きな音楽の喜びのための挑戦なのです。

準備の段階での、そして賛助出演の方々をはじめ、本日ここにお集まりの、心温かき人々に、深い感謝の意を表するとともに、少しでも多くの人々と、今日の私たちの喜びを分かち合えたら、これ以上の幸せはございません。』

(1973年 東海・山陰地方演奏旅行プログラムより)  
(22期・石井雅巳)



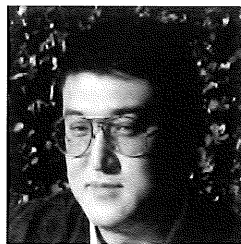
# Destination of Concert

## コンサート開催地



名護  
那覇  
沖繩(古座)  
宮古島

### Special Thanks!



写真家  
**駒崎共一**  
こまざき きょういち

ステージ写真——生まれた瞬間から消えてゆくさだめの音楽。カメラは、その一瞬を切り取り「幸せな記憶」として永遠の命をあたえる。駒崎共一氏の写真からは、なぜか音楽が聴こえてくる。誰よりも長く法政アカデミーを見守り続けた経験と、繊細な感性、クラシック音楽全般にわたる造詣の深さが、それを可能にした。

スナップ・ショット——青春の一瞬の輝きを、カメラは切り取る。いつまでも老いることのない「美しい記憶」として、私たちに微笑みをもたらす。他の誰よりも、多くのアカデミアンと「その時」を共有してきたから。

氏のアカデミー・デビューは1971年スプリング・コンサート、初の同行演奏旅行は1972年春、福島・仙台・山形を巡る東北の旅。それから40年、大柄な背をちょっと丸めたシャイなナイスガイにも、二人目の孫が生まれた。

K & Y 記

# List of Support and Joint Choir

## 賛助・ジョイント団体一覧

アカデミー合唱団では、演奏旅行の際、「地元合唱団との交流」という目的に沿って、多くの合唱団に賛助出演をして頂いたり、ジョイントコンサートを開催してきました。

以下に、その合唱団をご紹介しますとともに、この誌面を借りて、共演頂いたお礼を申し上げます。どうもありがとうございました。

また、春の声を聴く頃に日本中のどこかの街にお邪魔したいと思っています。日本中の合唱団の方と共演出来る日を楽しみに、そして日本中に私たちの歌声を届けるために。

年	場所	共演団体	場所	共演団体	場所	共演団体
1963	西条	—	広島	—	似島	—
	松山	—				
	青森	—				
1964	熊本	—	宮崎	—	小倉	—
	福岡	—				
1965	名古屋	—	津	—	浜松	—
	秋田	秋田男声合唱団				
1966	宇部	—	呉	—	防府	—
	京都	合唱団京都エコー	鹿児島	鹿児島大学フロイデコール	名護	—
1967					コザ	—
					那覇	沖縄混声合唱団
					旭川	—
1968	青森	—	札幌	たくぎん銀声会	広島	広島コール・アカデミー
1969	徳島	徳島合唱団/徳島大学リーダークライス	松山	愛媛大学合唱団		
	福岡	—				
1970	中止					
1971	西宮	コーロ・ポルテニオ	京都	合唱団京都エコー	金沢	中央公民館合唱団/MOR放送合唱団
1972	福島	FMC混声合唱団	仙台	グリーン・ウッド・ハーモニー	山形	木曜会合唱団
1973	名古屋	—	鳥取	鳥取市民合唱団	松江	合唱団みずうみ
1974	長野	長野市民合唱団コール・アカデミー	富山	K&クルー	新潟	しろがねコーラス
1975	北九州	北九州音愛合唱団	長崎	長崎県立短大フェミナルエコー	熊本	熊本混声合唱団
1976	青森	青森市民混声合唱団	函館	—	札幌	響友会
1977	高松	高松第一高校音楽部	徳島	—	高知	フラワーソングクラブ
1978	盛岡	岩手大学合唱団	仙台	—	福島	桜の聖母学院高校合唱団
1979	大阪	合唱団京都エコー	広島	崇徳高校グリークラブ	福岡	混声合唱団トニカ
1980	長野	長野西高校合唱団	富山	—	金沢	中央公民館合唱団
1981	岡山	—	宇部	宇部高校混声合唱団	松江	松江市民合唱団
1982	青森	混声合唱団グリーンコール	函館	—	札幌	札幌大谷短期大学輪声会
1983	静岡	静岡合唱団	岐阜	コール・ファンシエール	和歌山	和歌山市民合唱団/和歌山児童合唱団
1984	熊本	県立第一高校合唱団	鹿児島	鹿児島混声合唱団	宮崎	宮崎はまゆうコーラス
1985	宇都宮	リトルコール静	新潟	合唱団ユートライ	郡山	県立安積女子高校合唱団
1986	広島	広島ジュニアコーラス	福岡	西南学院グリークラブ	長崎	長崎混声合唱団
1987	愛知	クール・ジョワイエ	金沢	金沢混声合唱団	神戸	神戸中央合唱団
1988	倉敷	女声合唱団ゆう	下関	女声合唱団クールソレイユ	松山	松山市民合唱団
1989	仙台	グリーン・ウッド・ハーモニー	天童	天童混声合唱団	青森	混声合唱団グリーンコール
1990	長野	長野市民合唱団コール・アカデミー	富山	女声合唱団クール・クロア	尼崎	伊丹混声合唱団
1991	福岡	混声合唱団トニカ	熊本	県立第一高校合唱団		
1992	福島	FMC混声合唱団	秋田	秋田女声合唱団	函館	コールフロイデ
1993	岐阜	長良高校コーラス部/ハモール"長良"	米子	山陰放送少年合唱団	松江	松江北高校合唱部
1994	北九州	北九州混声合唱団	宮崎	宮崎少年少女合唱団	大分	アンジェルス児童合唱団
1995	盛岡	ローゼンコール	酒田	SAKATAローゼンコール	新潟	合唱団ユートライ
1996	岡山	女声合唱団ゆう	徳山	男声合唱団メールソレイネ	広島	フェミニンコール
1997	和歌山	和歌山児童合唱団	守口	女声合唱団アザレア	浜松	浜松市立高校合唱団
1998	宮古島	平良市少年少女合唱団	沖縄	混声合唱団「くねんぼ」	那覇	沖縄女子短大付属高校合唱部
1999	岩見沢	岩見沢混声合唱団	小樽	ローゼンコール	札幌	札幌アカデミー合唱団
2000	郡山	県立安積高校/安積女子高校	弘前	弘前ブルンネンコール	青森	混声合唱団グリーン・コール
2001	福岡	九州フレッシュメンコア/北九州メモリアル女声合唱団	鳥栖	鳥栖フラウエンコール/鳥栖市民合唱団	熊本	県立第一高校合唱団
2002	京都	合唱団京都エコー	奈良	Choeur Chene/エコーフローラ	大阪	淀川混声合唱団
2003	名古屋	合唱団ノース・エコー	三重	三重大学合唱団/ヴォーカルアンサンブル(EST)	岐阜	—
2004	神戸	はもーるKOBE	福井	福井コール・アカデミー	金沢	金沢混声合唱団
2005	盛岡	不来方高校音楽部	仙台	グリーン・ウッド・ハーモニー	福島	安積合唱協会
2006	広島	マツダ合唱団	岡山	女声合唱団萌え木/高梁高校コーラス部	松江	ゾリスアンサンブル
2007	長岡	長岡混声合唱団	富山	クール・クロア/ヴォーカルアンサンブル/クール麗	長野	信州大学混声合唱団
2008	大分	大分市民合唱団ウィステリア・コール	鹿児島	女声合唱団ハモール	宮崎	県立妻高校女声合唱団
2009	函館	女声コーラストリル	札幌	北海道大学混声合唱団	小樽	小樽市役所グリークラブ
2010	名古屋	合唱団ノース・エコー	浜松	浜松合唱団		
2011	青森	青森アカデミー混声合唱団	郡山	市立第二中学校/県立安積高校/安積黎明高校	宇都宮	ミモザ合唱団

は、ジョイントコンサートとして、開催されました。